

アサーションの社会的情報処理と情動喚起の関連

久木山 健 一¹⁾

問題と目的

中学生の時期は前青年期にあたり、親からの精神的離脱と同性の友人との親密な関係を持つことが課題とされている(松元, 1996)。しかし現代の青年の友人関係に関しては希薄化が多く指摘され、互いに傷つけあうのを恐れ友人関係を表面的なものにとどめておく傾向が考察されている(松井, 1996)。そのような状況の中で密接で深い友人関係を成立させるためには、“自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直にその場にふさわしい方法で表現し、そして相手が同じように発言することを奨励しようとする態度”であるアサーション能力を育成することに意義があるとされている(柴崎, 1998)。そのため、アサーショントレーニングの実践とその効果の測定が行われ、多くの成果を生んでいる(平木, 1993)。しかし、アサーションを可能にする認知的プロセスについての研究はそれほど多くとはいえない。Schwartz & Gottman (1976) は、当時のアサーショントレーニングを、アサーティブでない人にアサーション行動を獲得させる視点にとどまっていると批判し、アサーティブでない人が有する不適応的な欠陥を無くすような視点が望ましいと指摘している。また Heimberg & Becker (1981) は、アサーション研究における認知的要素の検討の重要性を指摘している。

アサーティブでない行動として、自分のことだけ考えて、他者を踏みにじるやり方である攻撃と、自分よりも他者を常に優先し、自分のことを後回しにするやり方である回避が存在する(Wilson & Gallois, 1993)。アサーションが出来ずに攻撃的になったり、回避を行ってしまうようになる原因を、認知プロセスのどこに問題があるかという視点で検討することにより、トレーニングの対象を明確にすることや、問題点を詳細に自覚することによる自発的な改善につながるということが可能になるという利点が考えられる。そのため、本研究ではアサーションの認知プロセスの検討を目的とする。

アサーションの認知プロセスの解明に有効な理論とし

て、本研究では Dodge の社会的情報処理モデルを取り上げる(Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1986)。Dodge の社会的情報処理理論は、我々が社会的状況で出会う様々な場面を情報処理の対象と捉え、その情報処理の欠陥によって問題行動の生起を説明する理論である。Dodge による社会的情報処理モデルは以下の6つのステップからなるプロセスが想定されている。①符号化：自己の内外に存在する手がかりを感覚過程を通じて受容し知覚する。②解釈：スキーマやスクリプトを照合しながらの手がかりの心的表象化と解釈が行われる。③目標設定：目標を作るか明確にすることが行われ、不適切な目標を打ち立てたり追求することが問題とされる(Asher & Renshaw, 1981)。④反応検索と構築：長期記憶にある行動のレパトリから状況に適切な反応を検索する。⑤行動選択：検索した反応の中から実際に行動に移す行動を評価し選択を行う。⑥行動実行：選択された行動の実行が行われる。社会的情報処理理論では、先行するステップが後のステップに影響を与えるプロセスを想定し、最終的な行動の生起を説明するモデルとなっている。

解釈ステップ、目標設定ステップはこれまで攻撃、主張行動などの行動実行ステップとの関連がみだされており(濱口, 1992; 松尾・新井, 1997など)、攻撃行動、アサーション、回避行動の生起の説明に有用であると考えられる。したがって本研究では、社会的情報処理の6ステップから、解釈ステップ、目標設定ステップ、行動実行ステップを取り上げることとする。

解釈のステップに関しては、問題の原因を相手の敵意に帰属する敵意帰属、問題の原因を自分に帰属する自責帰属、問題の原因を相手にも自分にも帰属せず偶然に帰属する偶然帰属を取り上げ検討を行う。これまでの社会的情報処理研究では、攻撃行動の実行を、相手に過度に敵意を帰属するバイアスなどにより説明し、適切な主張が出来ず攻撃行動を実行する者は敵意帰属バイアスが高いことを示した研究が多い(例えば Dodge, 1986; Slaby & Guerra, 1988)。しかし敵意帰属のみでは、アサーションおよびアサーションが出来ずに回避行動を実行してしまう現象の説明が困難であると考えられる。

1) 愛知学泉大学家政学部

平木（1993）ではアサーティブ、攻撃的、非主張的の3者を比較し、それぞれが順に「私もOK、あなたもOK」「私はOK、あなたはOKでない」「私はOKではない、あなたはOK」という対人判断によって特徴づけられるとまとめている。これらのことより、問題の所在を自分に帰属することにより回避の実行が高まる、および、相手にも自分にも帰属せず偶然に帰属することによりアサーションの実行が高まる関係も存在することが考えられる。

目標設定のステップに関しては、相手との関係性を目指す友好性目標と、主張行動を行おうとする主張性目標を取り上げる。この2つの目標に関しては、小学生を対象に挑発場面での応答反応の予測を検討した濱口（1992）において、友好性目標設定が主張的行動の正の予測因となっており、報復的攻撃行動の負の予測因になっていることおよび、主張的目標設定が主張的行動、報復的攻撃行動の正の予測因であり、無言行動の負の予測因であることが示されている。これらのことより、友好性目標が高いことと、攻撃行動の低さおよびアサーションの多さに関連があり、主張性目標が高いことと、回避行動の少なさおよびアサーションの多さに関連がある事が考えられる。また、解釈ステップとの関連を考えると、攻撃との関連が想定される敵意帰属は友好性目標と負の関係にあり、回避行動との関連が想定される自責帰属は主張性目標と負の関係があり、アサーションを導くことが予測される偶然帰属と友好性目標、主張性目標は正の関係を有することが想定される。

行動実行のステップに関しては、身体的攻撃・言語的攻撃・アサーション・回避行動を取り上げる。濱口（2001）によると、攻撃には大きく分けて、「偶然被害を受けただけなのに怒る」などの、嫌な出来事や刺激によって引き起こされた怒りなどのネガティブな感情を外に表出する反応的攻撃と、「人を脅かしたり、いじめたりする」などの、何かの目標を達成するための手段として行われる道具的攻撃が存在する。本研究では、後に挙げる情動との関連が深い反応的攻撃を取り上げ検討を行う。その際、秦（1990）を参考に攻撃を身体的攻撃と言語的攻撃とに区別し取り上げる事とする。

社会的情報処理研究で共通して指摘される問題点として、モデルに情動の要因が組み込まれていないため、情動との関連の検討があまりなされてきていないことが挙げられる（Crick & Dodge, 1994）。通常はアサーションが可能な者であっても、怒りを感じているためにアサーションが出来ずに攻撃的になってしまうことが考えられる。また、恐怖や不安を感じているために回避的になってしまうなどの、情動喚起による通常時にはみられない不適応的行動の生起が存在することが考えられる。この

ような現象を記述することは、教育的およびトレーニングの視点からみて意義が大きいと考えられる。この情動を考慮していないという問題点に関しては、Dodgeがモデルを提示した時から批判が存在している（Dolgin, 1986）。後の研究において、ネガティブなムード状態にあることにより敵意帰属が増加しうることの検討（Dodge & Somberg, 1987; 片岡, 1997）、感情と目標により行動実行が決定されることの検討（松尾・新井, 1997）などの研究がみられている。しかしながらまだ数が多いとは言えず、情動を考慮した社会的情報処理モデルの検討が必要と考えられる（Dodge, 1991）。

通常はアサーションが可能な者が、怒りの喚起のためアサーションが出来ずに攻撃的になってしまう、および恐怖や不安の喚起のため、回避的になってしまうという現象を、本研究では本来処理されるべき情報処理ステップが処理されず、短絡的なプロセスが生じるために行われると仮定することとする。土田（1996）によると、情動が高まった時には複雑な認知処理が出来にくくなり、短絡的な意思決定がなされやすくなることが指摘されている。またMilner（2000）は、情動喚起やストレスにより、社会的情報処理のすべてのステップに関して処理が行われる制御的な処理ではなく、解釈ステップからその他の処理を経ずに直接的に、行動実行ステップへの影響がみられるなどの自動的な処理が行われやすくなることが考えられると指摘している。これらのことを総合し本研究の社会的情報処理モデルにあてはめると、情動喚起により、解釈ステップより直接的に行動実行ステップが予測される。また解釈ステップと目標設定ステップ、目標設定ステップと行動実行ステップとの関連がみられなくなるなどのプロセスの変容が予測される。そのため、敵意帰属を行ったとしても、目標設定によりアサーションが可能になるといった、目標設定ステップによる緩衝作用がみられなくなることが考えられる。以上のことより、アサーションを不可能にして、攻撃を導きやすい情動として怒り、回避行動を導きやすい情動として恐怖・不安を想定し、社会的情報処理の各ステップが情動喚起により異なりうることを、情動喚起の高低群の比較を通じて検討する。また情動喚起によるプロセスの相違の検討を行う。

方法

調査対象 兵庫県内の公立中学生457名。内訳は、1年生201名（男子98名、女子103名）、2年生173名（男子92名、女子81名）、3年生83名（男子40名、女子43名）であった。

調査時期・手続き 1999年12月上旬に、クラス単位で担

任教師により集団で実施された。

質問紙

仮想場面を2場面作成し、社会的情報処理各ステップおよび情動喚起の測定を目的とした尺度の33項目に、各場面ともに6件法（まったくそう思わない、そう思わない、あまりそう思わない、少しそう思う、そう思う、たいへんそう思う）で回答を求めた。2場面の内訳は、アサーションが出来ない結果、攻撃行動の実行が高まると予測される、仲間からの意図の不明瞭な挑発を受ける挑発場面（以下、挑発場面とする）と、回避行動の実行が高まるとされる、自分から相手に要請を行うことが求められる主張場面（以下、主張場面とする）からなる。挑発場面に関しては濱口（1992）の凶工の状況を参考に、絵を書いていた所に友人がぶつかり、水入れの水がこぼれ絵が台無しになる状況を設定した。また、Dodge, McClaskey, & Feldman (1985), 松尾・新井（1997）を参考に、適切なアサーションが望まれる主張場面として、顕微鏡を独占されている状況を作成した。場面に登場する相手を同性とするために、登場人物の名前を変更することにより男女別の質問紙を作成し、各場面で以下の項目に評定を求めた。

1. 「解釈」ステップ：問題の所在を相手に帰属する敵意帰属、問題の所在を自分に帰属する自責帰属、問題の所在を偶然に帰属する偶然帰属を想定した。原因帰属と対人関係との関連を検討した、樋口・鎌原・大塚（1983）の帰属因を参考に12項目を作成した。

2. 「目標設定」ステップ：濱口（1992）を参考に友好性目標および主張性目標を測定する7項目を作成した。

3. 「行動実行」ステップ：身体的攻撃行動・言語的攻撃行動・アサーション・回避行動を測定する8項目を作成した。解釈および目標設定ステップでは状況に依存しない項目表現を用い2場面共通の項目を使用した。本ステップでは調査協力者の理解を容易にするために、アサーションに関しては2場面それぞれに適した項目の作成を行った。

4. 情動喚起に関する項目：怒りおよび恐怖・不安情動の喚起を測定する項目について、心理学を専攻する大学院生3名で検討し6項目を作成した。

上記の手続きで作成された各尺度項目を、実験の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生5名に、仮定されたカテゴリーへの分類を求めた所、100%の一致を得ることが出来たために使用した。

結果

1. 尺度の検討

(1) 「解釈」ステップ尺度

「解釈」尺度項目について、各場面ごとに主因子法による因子分析を行った。固有値の1以上の基準（挑発場面を例にあげる。以下同様。4.15, 1.83, 1.15, 0.89, …）および解釈のしやすさより、3因子解を採用しバリマックス回転を行ったところ、両場面ともに共通する因子構造がみいだされた。各因子はそれぞれ、高く負荷している項目内容からF1「自責帰属」F2「敵意帰属」F3「偶然帰属」と命名された（Table 1）。

(2) 「目標設定」ステップ尺度

「目標設定」尺度項目について、各場面ごとに主因子法による因子分析を行った。共通性および因子負荷量から1項目を除外した。再度主因子法による因子分析を行った結果、固有値1以上の基準（2.71, 1.47, 0.61, …）および解釈のしやすさより、2因子解を採用しバリマックス回転を行ったところ、両場面ともに同様の因子構造がみいだされた。各因子はそれぞれ、高く負荷している項目内容からF1「友好性目標」F2「主張性目標」と命名された（Table 2）。

(3) 「行動実行」ステップ尺度

「行動実行」尺度項目について、各場面ごとに主因子法による因子分析を行った。固有値1以上の基準より3因子解が考えられたが（2.68, 1.53, 1.23, 0.86, 0.63, …）、解釈のしやすさより、4因子解を採用しバリマックス回転を行ったところ、両場面ともに共通する因子構造がみいだされた。各因子はそれぞれ、高く負荷している項目内容からF1「身体的攻撃」F2「言語的攻撃」F3「アサーション」F4「回避行動」と命名された（Table 3）。

(4) 情動喚起尺度

情動喚起尺度項目について、各場面ごとに主因子法による因子分析を行った。固有値1以上の基準（2.25, 1.65, 0.97, …）および解釈のしやすさより2因子解を採用しバリマックス回転を行ったところ、両場面ともに同様の因子構造がみいだされた。各因子はそれぞれ、高く負荷している項目内容からF1「恐怖・不安情動」F2「怒り情動」と命名された。

分析にあたっては、各因子に高く負荷する項目2場面分を合計したものの平均点を各因子の下位尺度得点とした²⁾（Table 1～4）。内的一貫性を確認するため α 係数を算出したところ、いずれも許容できる値を示したためにそのまま使用した。ただし、身体的攻撃に関しては、平均値 2.10 ($SD=1.31$) であり、本研究で使用された

Table 1 「解釈」ステップ因子分析結果

	F 1	F 2	F 3	h ²	桃発	α 主張	合計
5. 自分が、悪いことをしたから	.74	.01	.02	.54			
	.75	.10	.17	.61			
12. 自分が、してはいけないことをしてしまったから	.65	.21	-.02	.46			
	.60	.20	.13	.42			
3. 自分の、性格が悪いから	.60	.20	-.04	.40			
	.72	.19	.03	.55	.78	.82	.87
6. 自分が、悪いことをしたから	.58	.16	-.06	.37			
	.74	.03	.09	.56			
7. 自分が、こういうことをよくされる子だから	.49	.25	-.01	.31			
	.49	.19	.08	.29			
1. 自分が、タロウ君と仲良くしようとしてこなかったから	.45	.24	-.13	.28			
	.58	.20	.08	.38			
9. タロウ君が、イライラしていたから	.20	.81	-.03	.70			
	.29	.67	.20	.57			
10. タロウ君の、性格が悪いから	.20	.65	-.40	.62			
	.04	.56	-.42	.50	.80	.69	.80
11. タロウ君が、嫌な気分の時であったから	.34	.64	-.06	.52			
	.22	.74	.11	.61			
2. タロウ君が、こういう事をよくする子だから	.23	.48	-.38	.43			
	.11	.42	-.19	.23			
8. 偶然、こうなったから	-.08	-.11	.74	.57			
	.11	-.06	.77	.61			
4. たまたま、運が悪かったから	.05	-.09	.69	.48			
	.30	.04	.66	.53			
二乗和	2.36	1.97	1.35				
	2.82	1.65	1.37				

上段…桃発場面
下段…主張場面

Table 2 「目標設定」ステップ因子分析結果

	F 1	F 2	h ²	桃発	α 主張	合計
2. タロウ君と、仲良しいたい	.85	.11	.74			
	.86	.08	.75			
3. タロウ君と、絶交したくない	.81	.09	.66			
	.85	.12	.74	.83	.85	.89
1. タロウ君を困らせたくない	.69	-.02	.48			
	.67	-.01	.45			
6. タロウ君を、嫌な気持ちにしたい	.64	-.09	.42			
	.66	.04	.44			
4. タロウ君に思っていることを伝えたい	.20	.81	.70			
	.29	.67	.57	.63	.73	.78
7. タロウ君になにかを言いたい	.20	.65	.62			
	.04	.56	.50			
二乗和	2.30	0.98				
	2.40	1.20				

上段…桃発場面
下段…主張場面

状況において身体的攻撃を実行する者が少数であることが確認されたために、以降の分析からは削除した。

2) 濱口(1992)などでは、社会的情報処理の場面特殊性の前提より、単一場面における検討が行われている。しかし場面特殊性の仮説は支持されないことも多く(例えば、橋・田中, 1998)、仮説に限界があることが指摘され、異なる場面においても、行われる社会的情

2. 社会的情報処理による行動の予測の検討

各行動実行ステップに影響する社会的情報処理のプロ

報処理には、個人内である程度の一貫性が存在すること、およびその一貫性に影響するものとして Knowledge Structuresが考えられることが指摘されている(Dodge, 1993; 松尾・新井, 1996)。そのため、本研究では複数の場면을統合することによる検討を行った。

Table 3 「行動実行」ステップ因子分析結果

	F1	F1	F1	F1	F1	桃発	α 主張	合計
1. たたいたりけったりする	.86	.28	.07	.05	.83			
	.75	.33	-.05	.01	.68	.88	.84	.89
5. なぐりつける	.82	.26	.10	-.08	.76			
	.88	.17	-.12	.11	.83			
2. 文句を言う	.27	.80	-.06	.09	.73			
	.21	.85	.09	-.06	.77	.73	.74	.83
6. 悪口を言う	.23	.67	.12	-.10	.53			
	.27	.64	-.01	.20	.52			
3. どうするかをタロウ君と相談する	.00	-.06	.64	-.01	.41			
3. タロウ君に貸してもらえよう相談する	-.11	.08	.81	-.08	.67	.57	.75	.68
7. 「一緒にかたづけけるのを手伝って」と言う	-.02	.05	.64	.10	.42			
7. 「よかったら僕にも貸してくれない?」と言う	-.04	-.01	.75	.00	.57			
8. どこかへ行ってしまう	.22	.19	-.01	.72	.61			
	.03	.20	-.04	.60	.41			
4. 何も言わずに、黙っている	-.03	-.07	-.09	.57	.34			
	.05	-.08	.01	.66	.45			
二乗和	2.40	0.99	0.69	0.54				
	2.22	1.30	0.79	0.57				

上段…桃発場面
下段…主張場面

Table 4 情動喚起因子分析結果

	I	II	h ²	桃発	α 主張	合計
7. びくびくした気持ち	.70	.06	.50			
	.67	.04	.47			
8. 心配な気持ち	.68	-.03	.49			
	.64	.21	.46	.77	.71	.80
3. 不安な気持ち	.65	.05	.51			
	.65	.27	.50			
9. 恐ろしい気持ち	.63	.12	.41			
	.52	-.08	.29			
6. 怒りの気持ち	.08	.90	.83			
	.06	.83	.70	.84	.81	.84
2. イライラした気持ち	.08	.78	.64			
	.03	.81	.66			
二乗和	1.86	1.55				
	1.62	1.44				

上段…桃発場面
下段…主張場面

セスがどのようなものであるかの検討を行う。まず解釈ステップの敵意帰属、自責帰属、偶然帰属それぞれが、目標設定ステップの友好性目標、主張性目標それぞれおよび行動実行ステップの言語的攻撃、アサーション、回避行動それぞれに影響を与える因果を想定した。また行動ステップは目標設定ステップからも影響を受けるという因果関係を想定した。加えて、解釈ステップ尺度の各下位尺度得点間に相関を想定し、構造方程式を用いた逐次モデルを作成した。調査協力者を対象とし、統計ソフトウェア AMOS4.0 を用いて分析した結果、最終的に選択した因果モデルを Fig. 1 に示す。モデルの全体的評価の指標となる適合度指標 (GFI) は .99、また、修正適合度指標 (AGFI) は .88 であった。修正適合度指

標の値が若干低めであるが、この程度であればモデルの妥当性を著しく損なうものではないと判断し採用した。以下、5%水準で有意となった係数について記述する。友好性目標に関しては、敵意帰属からの影響を示す係数が -.28 であり、自責帰属からの影響を示す係数が .37 であり、偶然帰属からの影響を示す係数が .33 であった。主張性目標に関しては、敵意帰属からの影響を示す係数が .27 であった。言語的攻撃に関しては、敵意帰属からの影響を示す係数が .53 であり、友好性目標からの影響を示す係数が -.26 であり、主張性目標からの影響を示す係数が .37 であった。アサーションに関しては、友好性目標からの影響を示す係数が .31 であり、主張性目標からの影響を示す係数が .29 であった。回避行動に関し

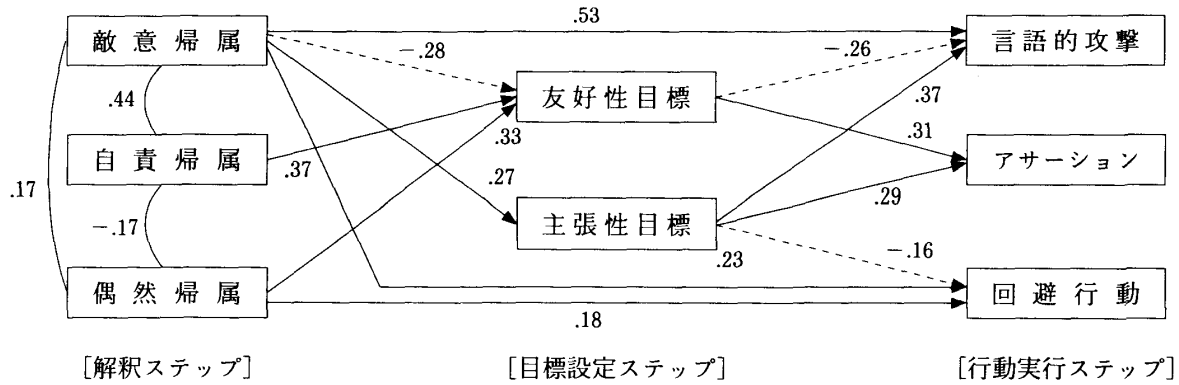


Fig. 1 アサーションの社会的情報処理のパス図

誤差変数のeとどの図示は省略した。また5%水準で有意なパスのみを記載した。

では、敵意帰属からの影響を示す係数が.23であり、偶然帰属からの影響を示す係数が.18であり、主張性目標からの影響を示す係数が-.16であった。敵意帰属と自責帰属の間に.44、敵意帰属と偶然帰属の間に.17、自責帰属と偶然帰属の間に-.17の相関がみられた。

3. 情動喚起高低群による社会的情報処理の相違の検討

まず、各情動の喚起得点の上位25%、下位25%を基準に各情動喚起の高群・低群を抽出した。各情動ごとの高群・低群の人数の内訳は、怒り情動喚起高群 (n = 117: 以下, AG-H群とする)、怒り情動喚起低群 (n = 100: 以下, AG-L群とする)、恐怖・不安情動喚起高群 (n = 112: 以下, AF-H群とする)、恐怖・不安情動喚起低群 (n = 112: 以下, AF-L群とする)であった。

(1) 怒り情動喚起に関して

まず、両群において社会的情報処理の各測度の平均点に差があるかを検討するために、社会的情報処理各測度のt検定を行った (Table 5)。その結果、AG-H群はAG-L群に比べて、敵意帰属・主張性目標・言語的攻撃行動が高く、偶然帰属・友好性目標が低いことがみ

だされた。次にAG-H群とAG-L群それぞれにおいて社会的情報処理プロセスがどのように異なるのかを検討するために、Fig. 1と同様のモデルに対し、多母集団の同時分析を行った。モデルの全体的評価の指標となる適合度指標 (GFI) は.98、また、修正適合度指標 (AGFI) は.83であった。係数をTable 6に挙げる。

AG-HおよびAG-L両群ともに、偶然帰属と友好性目標に正の関係、敵意帰属と言語的攻撃に正の関係、友好性目標と言語的攻撃に負の関係、主張性目標と言語的攻撃に正の関係、友好性目標とアサーションに正の関係が、敵意帰属と自責帰属に正の相関がみられた。AG-H群のみにみられた関係としては、主張性目標とアサーションに正の関係、敵意帰属と回避行動に正の関係がみられた。AG-L群のみにみられた関係としては、自責帰属と友好性目標に正の関係、自責帰属と言語的攻撃に正の関係、偶然帰属と回避行動に正の関係、友好性目標と回避行動に負の関係がみられた。

(2) 恐怖・不安情動喚起に関して

恐怖・不安の情動喚起の高低によって社会的情報処理のプロセスにどのような相違があるかの検討を行う。両群において社会的情報処理の各測度の平均点に差がある

Table 5 情動喚起高低群ごとの各社会的情報処理ステップの平均値と標準偏差

	怒り情動喚起					恐怖・不安情動喚起				
	低群		高群		t値	低群		高群		t値
	Mean	(SD)	Mean	(SD)		Mean	(SD)	Mean	(SD)	
敵意帰属	2.36	(0.81)	3.50	(1.05)	-8.88 **	2.62	(1.00)	3.22	(1.00)	-4.47 **
自責帰属	2.02	(0.77)	2.17	(0.93)	-1.26 n.s.	1.71	(0.59)	2.64	(0.79)	-9.69 **
偶然帰属	3.89	(1.15)	3.44	(1.31)	2.63 **	3.74	(1.25)	3.83	(1.19)	-0.54 n.s.
友好性目標	4.12	(1.13)	3.04	(1.26)	6.61 **	3.16	(1.31)	4.00	(1.17)	-5.05 **
主張性目標	3.68	(1.27)	4.76	(1.16)	-6.80 **	4.10	(1.40)	4.35	(1.12)	-1.49 n.s.
言語攻撃行動	2.48	(1.24)	4.51	(1.32)	-11.41 **	3.34	(1.57)	3.51	(1.30)	-0.87 n.s.
アサーション	3.95	(1.13)	3.89	(1.35)	0.33 n.s.	3.89	(1.30)	4.15	(1.17)	-1.55 n.s.
回避行動	2.46	(1.17)	2.56	(1.31)	-0.53 n.s.	2.31	(1.35)	2.86	(1.15)	-3.26 **

*...p<.05 ** p<.01

Table 6 各情動喚起高低群の係数

			怒り低	怒り高	恐怖・不安低	恐怖・不安高
係数						
敵意帰属	⇒	友好性目標	-.14	-.04	-.10	-.41**
自責帰属	⇒	友好性目標	.37*	-.02	.34	.45**
偶然帰属	⇒	友好性目標	.28**	.53**	.47**	.44**
敵意帰属	⇒	主張性目標	.03	.11	.30	.21
自責帰属	⇒	主張性目標	.15	-.01	.54*	-.36*
偶然帰属	⇒	主張性目標	.14	-.05	-.10	.13
敵意帰属	⇒	言語的攻撃	.36*	.36**	.59**	.30*
自責帰属	⇒	言語的攻撃	.41*	-.01	-.07*	-.14
偶然帰属	⇒	言語的攻撃	-.06	-.13	.11	-.07
友好性目標	⇒	言語的攻撃	-.30**	-.21*	-.26*	-.27*
主張性目標	⇒	言語的攻撃	.24**	.27**	.45**	.30**
敵意帰属	⇒	アサーション	-.09	-.09	-.23	-.15
自責帰属	⇒	アサーション	-.25	.08	-.26	.08
偶然帰属	⇒	アサーション	.05	.00	.08	-.02
友好性目標	⇒	アサーション	.37**	.26*	.46*	.01
主張性目標	⇒	アサーション	.11	.47*	.37**	.42**
敵意帰属	⇒	回避行動	.17	.34**	.37*	.05
自責帰属	⇒	回避行動	.28	-.17	.14	.34
偶然帰属	⇒	回避行動	.29**	.20	.48**	.24*
友好性目標	⇒	回避行動	-.19*	.07	-.30**	-.10
主張性目標	⇒	回避行動	-.13	-.13	-.12	-.15
相関						
自責帰属	⇔	敵意帰属	.50**	.48**	.44**	.33**
偶然帰属	⇔	自責帰属	-.15	-.12	-.34**	-.11
偶然帰属	⇔	敵意帰属	.16	.06	-.03	.29

**... $p < .01$, * $p < .05$.

かを検討するために、社会的情報処理各測度の平均点の t 検定を行った (Table 5)。その結果、AF-H群は AF-L群に比べて、敵意帰属・自責帰属・友好性目標・回避行動が高いことがみいだされた。また、AF-L群と AF-H群それぞれにおいて、社会的情報処理プロセスにどのような相違があるかを検討するために、Fig. 1 と同様のモデルに対し、多母集団の同時分析を行った。モデルの全体的評価の指標となる適合度指標 (GFI) は .98, また、修正適合度指標 (AGFI) は .85であった。係数を Table 6 に挙げる。

AF-L群およびAF-H両群に共通して、偶然帰属と友好性目標に正の関係、敵意帰属と言語的攻撃に正の関係、友好性目標と言語的攻撃に負の関係、主張性目標と言語的攻撃に正の関係、主張性目標とアサーションに正の関係、偶然帰属と回避行動に正の関係、敵意帰属と自責帰属の間に正の相関がみられた。AF-L群とAF-H群の結果を比較すると、AF-L群においては、自責帰属と主張性目標に正の関係、友好性目標とアサーションに正の関係、友好性目標と回避行動との間に負の関係、敵意帰属と回避行動との間に正の関係、自責帰属と偶然帰属の間に負の相関がみられた。AF-H群においては、敵意帰属と友好性目標に負の関係、自責帰属と友好性目標との間

に正の関係、自責帰属と主張性目標に負の関係、敵意帰属と偶然帰属の間に正の相関がみられた。

考察

1. 社会的情報処理による行動の予測に関して

解釈ステップと目標設定ステップの間のプロセスに関しては、問題の原因について、相手に敵意を持たず、自分に問題の原因があるもしくは原因がいずれか一方ではなく偶然であるとする事が多い時に、友好性目標が高いことがみいだされた。また問題の原因を相手の敵意に帰属する度合いの高さと主張性目標の高さとの間に関連があることがみいだされた。想定された自責帰属からの負の影響、偶然帰属からの正の影響はみられなかった。自責帰属と友好性目標との間には正の関連がみられている。このことより、自分が悪いと考える事により、単純に主張する目標が減少するのではなく、相手との関係をたもとうとする目標の元、主張性目標が減少しないという関係が存在する事も考えられる。偶然帰属に関しては、偶然であるから主張性目標が高まる場合と、偶然であるから、主張を行う必要がないため主張性目標が高まらない関係が存在する事が考えられる。言語的攻撃に関しては、問題の原因を相手の敵意に帰属する度合いが高い、友好

性目標が低い、主張性目標を有する度合いが高い事により、言語的攻撃が高いことがみいだされた。主張性目標は敵意帰属からの正の影響を受けている。これらのことから、言語的攻撃が実行されるプロセスとして、問題の原因を相手の敵意に帰属することから直接および、敵意帰属により、友好性目標の低下と主張性目標の増加が導かれ、そのために言語的攻撃の生起が高まるというプロセスが存在することが考えられる。

アサーションに関しては、友好性目標からの正の影響関係と、主張性目標からの正の影響関係が存在している。友好性目標は自責帰属および偶然帰属からの正の影響関係を受けている。これらのことから、状況において問題の原因を相手におかず、問題の原因を偶然だと帰属することにより友好性目標が高まる、および主張性目標の高まりによりアサーションが可能になるという、アサーションのプロセスが考えられる。このことより、間接的にはあるが偶然帰属がアサーションの予測因となる想定が一応の支持を得た。

回避行動実行に関しては、敵意帰属および偶然帰属からの正の影響関係および主張性目標からの負の影響関係が存在している。敵意帰属と回避行動実行の正の関係がみられており、敵意帰属により回避行動も予測されることが示された。加藤（2000）は対人ストレスへの対処方略の分類の1つとして、人間関係を積極的に放棄・崩壊させる対処が存在することをみだしている。本研究における回避行動の実行においても、相手に悪意を感じるにより、回避することで相手との関係を放棄しようとすることに関連があることが考えられる。偶然帰属と回避行動との間に正の影響関係がみられたのは、問題の原因を偶然と解釈するために、積極的にアサーションを行い状況を変化させようとするのがないためとも考えられる。また、主張しようとする目標を持つことで、回避行動を減少させることが出来ることもみいだされた。想定した自責帰属との影響関係は有意とならなかった。自責帰属に関しては、友好性目標に正の影響を与えており、自分が悪いと考えることによって萎縮するのではなく、改善しようとする適応的な流れが存在することが考えられる。

行動実行ステップの3つを比較すると、攻撃行動および回避行動においては、解釈ステップからの直接的な影響を受けている。しかしアサーションに関しては、解釈ステップからの直接的な有意な影響関係は存在していない。これらのことから、アサーションに関しては解釈のステップを経て、友好性目標もしくは主張性目標が高まることなしには生起しないことも考えられる。また敵意帰属などに関して友好性目標を持つことが緩衝作用を持

つことなども考えられる。また対人的な面から見ると、本邦においてはアサーションは余りすべきではないネガティブなものに捉えられる可能性も存在する(平木, 1993)。アサーションの分類として共感的アサーションというものが存在し、権利のみのアサーションと共感を伴ったアサーションでは後者の方が相手からの好意度が高いということが示されている (Wilson & Gallois, 1993)。これらのことから、相手にも受け入れられる適切な主張としてのアサーションと友好的目標との関連を今後検討することが重要であると考えられる。

2. 情動喚起高低群による社会的情報処理の相違について

(1) 怒り情動喚起に関して

t検定の結果より、怒り情動の喚起の高い群は怒り情動の喚起の低い群に比べて、問題の原因を相手のせいにすることが多く、偶然であると思うことが少なく、主張しようとする目標を持つことが多く、仲良くしようとする目標を持つことが少なく、言語的攻撃行動を実行することが多いことが示された。怒りの喚起が想定されている言語的攻撃において、怒り低群と怒り高群において有意な差がみられている。これらのことから、本研究で使用した情動喚起尺度による情動喚起高低群の分離の操作が、一応の妥当性を有していることが支持されたと考えられる。怒り低群と怒り高群のプロセスの相違を、目標設定ステップとの関連に注目して考察すると、怒り低群においては友好性目標により回避行動が減少するという関連がみられているが、怒り高群においてはそのような関係はみられない。このことより、怒りの喚起により目標ステップによる緩衝作用が失われるなどの相違が存在することが考えられる。しかし、主張性目標とアサーションとの関連は怒り高群にしかみられていない。怒り低群では、高群に比べ主張性目標が有意に低いことから、友好性目標に基づいたアサーションを実行することが考えられる。この点に関しては、アサーション行動をより詳細に分類した上での検討が必要であろう。怒り低群における自責帰属と言語的攻撃との正の関連に関しては、自責帰属が回避行動を予測するという想定と異なっている。自責帰属には各情動に共通して敵意帰属との中程度の相関があるため、このような結果がみられたと考えられるが、この点に関しては今後詳細な検討が必要であると考えられる。また、情動喚起を想定しない分析でみられた、偶然帰属と回避行動の正の関係は怒り低群においてのみみられた。解釈ステップから行動実行ステップへの直接的な影響関係は、怒り低群のほうが多くみられる結果となった。ただし、それらの多くは情動喚起を導入しない

分析の結果でみだされているものであった。怒り情動喚起が低い時は、情動を導入しない社会的情報処理モデルと同様の結果を示すことが多いのに対し、怒り高群において言語的攻撃の実行が多いことをあわせて考えると、怒り高群では社会的情報処理では測定できないより直接的なプロセスにより行動が実行されていることも考えられる。

(2) 恐怖・不安情動喚起に関して

t検定の結果より、恐怖・不安情動喚起高群は恐怖・不安情動喚起低群に比べて、問題の原因を相手に帰属することが多く、自分に帰属することが多く、仲良くしようとする目標を持つことが多く、回避行動を実行することが多いことがみいだされた。恐怖・不安低群と恐怖・不安高群でのプロセスの相違を目標設定ステップとの関連に注目して考察すると、恐怖・不安低群においては、原因を自分に帰属することにより主張性目標が高まる関係が存在する。一方恐怖・不安高群においては、原因を自分に帰属することにより主張性目標が減少する関係が存在した。恐怖・不安情動喚起が低い場合は、自分が悪いと帰属することにより、状況改善のために積極的に主張を行う目標を立てることが可能なのに対し、恐怖・不安情動喚起が高い場合は、そのような目標を立てられなくなるが考えられる。恐怖・不安情動喚起低群においては友好性目標とアサーションの間に正の関連が存在しているが、恐怖・不安情動喚起高群においてはそのような関連がみられない。このことより、恐怖や不安といった情動の喚起が少ない時には、友好性目標が高い事とアサーションを行うことの多さに関連があるのに対し、恐怖・不安情動の喚起が高い時は、友好性目標が高くてもアサーションが高まることが無いことが考えられる。また、恐怖・不安情動喚起低群においては、友好性目標と回避行動実行の間の負の関連が存在しており、友好性目標をもつことにより回避行動をとることを避けることが出来るということが可能になるのに対し、恐怖・不安情動喚起高群においては友好性目標と回避行動のパスは有意とはならなかった。t検定の結果より恐怖・不安情動喚起高群は低群に比べて友好性目標が高いことが示されている。しかし恐怖・不安情動喚起高群において友好性目標と言語的攻撃との間の負の関連がなくなることが無いことが示されている。そのため、恐怖や不安の情動が高まることにより、仲良くしようという目標のもと、攻撃行動を実行することを避けることは可能であるが、アサーションを行うことが出来ずに回避行動を行うことを止めることも出来なくなるという、目標設定による緩衝作用が失われることも考えられる。敵意帰属から友好性目標への負の影響関係は、恐怖・不安情動喚起高群のみ

でみられている。この点に関しては、恐怖・不安感情喚起が高い時に、敵意帰属を行うと友好性目標が確実に減少するということを意味するとも考えられる。

(3) 両情動での結果を総合した考察

情動喚起のt検定の結果より、怒り情動喚起が高いと攻撃行動の実行が多く、恐怖・不安情動喚起が高いと回避行動の実行が多いことがみだされている。また、両情動喚起高群は低群に比べてアサーションを導くような解釈ステップから目標設定への影響関係が少なく、アサーションを導く目標設定ステップから行動実行ステップへの影響関係を示すものが少ないことが示されている。これらのことから怒りや恐怖・不安といった情動によって、冷静な社会的情報処理プロセスの進行が阻害されることにより、目標設定ステップによる緩衝作用が失われるなどによりアサーションが不可能になり、攻撃や回避などといった行動の実行が多くなるということが考えられる。怒り情動喚起低群および恐怖・不安情動喚起低群のどちらともにおいて、友好性目標はアサーション実行を高めその他の行動の実行を低めるという関連がみだされている。これまでのアサーショントレーニングにおいては主張スキルや主張性目標に注目したものが多かったが、本研究の結果からは、友好性目標にも注目したアサーショントレーニングなどを行う重要性がみだされたと考えられる。

3. 総合的討論と今後の課題

本研究では中学生を対象に、アサーションに関連する社会的情報処理のプロセスの検討および情動の喚起による社会的情報処理プロセスの相違の検討を行った。しかし本研究は仮想状況を使用した質問紙研究であるために、実際の社会的情報処理プロセスおよび情動の喚起ではなく、調査協力者が認識しているものによる結果であるという限界が存在する。また、本研究で作成された社会的情報処理尺度に関しては、尺度を構成する項目数が少ないものが存在し、併存的妥当性についての検討などを行うことが出来ていない。今後はより項目数を増やすなどによる尺度の安定性の向上や、実験やロールプレイなどによる妥当性の検討、実際の情動の操作などを行った上での検討が望まれるといえる。

最後に、上のような限界はあるが、本研究で得られたアサーションの生起過程に関する知見より、プロセスに即したトレーニングの考案などが可能になることが考えられる。その際、友好的な目標などの目標設定の側面に注目することの重要性が示唆されたと考えられる。また、情動喚起高低群による社会的情報処理の相違の検討より、目標設定ステップと他のステップとの関連が情動喚起時

にはみられないことが多いことがみだされた。これは、認知プロセスに着目したアサーショントレーニングを行う際、情動喚起の要因を導入することが重要であることを示唆する結果であると考えられる。今後は本研究で得られた情動喚起によるプロセスの変容に関する知見に基づいた、情動喚起を考慮に入れたトレーニングプログラムを行い、その実践の中から、社会的情報処理モデルに情動喚起要因を明確に位置づけていくことが求められるであろう。

文 献

- Asher, S. R., & Renshaw, P. D. 1981 Children without friends: Social knowledge and social skill training. In S. R. Asher & J. M. Gottman (Eds.), *The Development of Children's Friendships*. Cambridge University Press.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Dodge, K. A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter, (Ed.), *The Minnesota Symposia on Child Psychology*, **18**, Hillsdale
- Dodge, K. A. 1991 Emotion and social information processing. In J. Garber & K. A. Dodge (Eds.) *The Development of emotion regulation and dysregulation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dodge, K. A. 1993 Social-cognitive mechanisms in the development of conduct disorder and depression. *Annual Review of Psychology*, **44**, 559-584.
- Dodge, K. A & Somberg D. R. 1987 Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, **58**, 213-224.
- Dodge, K. A., McClaskey, C. L., Feldman, E 1985 Situational approach to the assessment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 344-353.
- Dolgin, K. G. 1986 Needed steps for social competence : Strengths and present limitations of Dodge's model. In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota Symposia on Child Psychology*, **18**, Hillsdale.
- 濱口佳和 1992 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 *教育心理学研究*, **40**, 224-231.
- 濱口佳和 2001 学級の中の攻撃行動 いじめる子どもとキレる子ども キレる (心理学ワールド14) 日本心理学会
- 秦 一士 1990 敵対的攻撃インベントリーの作成 *心理学研究*, **61**, 227-234.
- Heimberg, R. G. & Becker, R. E. 1981 Cognitive and behavioral models of assertive behavior: Review, analysis and integration. *Clinical Psychology Review*, **1**, 353-373.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 友人関係場面における原因帰属様式と社会的地位 *教育心理学研究* **31**, 141-145.
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニング - さわやかな自己表現のために - 日本精神技術研究所
- 片岡美菜子 1997 攻撃および非攻撃児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果 *教育心理学研究*, **45**, 71-78.
- 加藤 司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 *教育心理学研究*, **48**, 225-234.
- 松井 豊 1996 親離れから異性との親密な関係の成立まで (齊藤誠一 編 人間関係の発達心理学4 青年期の間人間関係 培風館)
- 松元泰儀 1996 人間関係のつまずきと病理 (齊藤誠一 編 人間関係の発達心理学4 青年期の間人間関係 培風館)
- 松尾直博・新井邦二郎 1996 子どもの社会性に対する動機づけからのアプローチ *筑波大学心理学研究*, **18**, 105-116.
- 松尾直博・新井邦二郎 1997 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響 *教育心理学研究*, **45**, 303-311.
- Milner, J. S. 2000 Social information processing and child physical abuse: Theory and research. In D. J. Hansen (Ed) *Nebraska Symposium on Motivation*, **46**, 39-84.
- Schwartz, R. M. & Gottman, J. M 1976 Toward a task analysis of assertive behavior. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 910-920.
- 柴崎祐子 1998 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について

- カウンセリング研究, 31, 19-26.
- Slaby, R. G. & Guerra, N. G. 1988 Cognitive mediators of aggression in adolescent offenders : 1. Assessment. *Developmental Psychology*, 24, 580 - 588.
- 橘 良治・田中奈津紀 1998 応答的行動に及ぼす攻撃性・愛他性と社会的情報処理の効果 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 47, 215-226.
- 土田昭司 1996 感情と社会的判断 土田昭司・竹村和

- 久(編) 対人行動学シリーズ4 感情と行動・認知・生理 誠信書房.
- Wilson, K. & Gallois, C. 1993 Chapter 6: Importance of social rules about negative assertion: *Assertion & Its Social Context-International series in experimental social psychology*. Pergamon Press.

(2004年9月30日 受稿)

ABSTRACT

The Social Information Processing of Assertion and their Relation to Emotions.

Kenichi KUKIYAMA

The purpose of this study was to examine the social information processing of assertion. 457 junior high school students completed the questionnaire, consisting items on emotion-elicited scales and social information processing scales (attributional bias step, goal clarification step and response enactment step). Path analysis indicated that friendship goal and assertive goal contributed positively to the enactment of assertion. There were different social information processing patterns between low emotion-elicited group and high emotion-elicited group. High emotion-elicited group showed weak relations among social information processing steps. These findings were discussed in terms of a social information processing and emotions.

Key words: assertion, social information processing, emotions, junior high school students